



八千代市郷土歴史研究会

会長 村田一男

事務局長 牧野光男

連絡先 勝田台 3-24-10

電話 047-483-6278

ドキュメント

## 「ふるさと再発見 八千代の道しるべ」発刊の記録 郷土史研発足以来の大プロジェクトに挑む！！

### 「市民企画提案事業」 応募から採用決定まで

本会の道標調査が3年目をむかえた2000年4月15日、八千代市の広報に「ふるさと八千代市民企画提案事業」の募集の記事が載り、ほどなく会長宛にも、同じ募集要項が郵送された。

この市民企画提案事業とは、21世紀を記念の1年とするため、市民が企画し主体的に実施する公共性のある事業、即ち市内グループ・団体が実施するまちづくりに関する事業にに対し1事業300万円まで補助、相談や情報提供などにより市職員が支援するというもの。

4月30日の例会で会長から「このプロジェクトに応募して道標調査の本をだそうか」という声があがり、役員で応募を検討し、5月15日に計画案を市に提出、そして5月27日の恒例の見学旅行の席で、その全貌が明かにされた。

その提案は次の通り

『ふるさと再発見「八千代の道標案内」の刊行

＜八千代市郷土歴史研究会44人＞  
道標のすべてを調査したところ、市内には約100基が存在し、歴史的背景を持った昔の道筋が明らかになった。道標全体をまとめ、解説を付け、歴史探訪に役立つ魅力的な地図を作成して市民に提供したい。』

「広報やちよ」などで5月15日まで募集した結果、市には33団体から39事業の応募があった。補助金の要望額は予算額2,300万円を大幅に超え、このため「ふるさと八千代市民企画提案事業選定委員会」において厳正に審査されることとなった。

第1回選定委員会は6月12日に開催、選定方法は、企画力、公共性、事業遂行能力、まちづくりへの貢献度、推薦度について9人の委員が評価・採

点し、6月19日までに採点表を集計、6月21日の第2回選定委員会で支援対象とする事業が選定された。

対象事業は全部で10事業で、本会が提案した「ふるさと再発見『八千代の道標案内』の刊行」や、八千代吹奏楽団の「我が母校の校歌を聴いて下さい&ミニコンサート」など多様な事業が支援対象に決定した。

### 申請手続きが始まる

採用が決定して始まったのが、市への煩雑な申請手続き。

7月2日の役員会と4日の市主催の選定結果説明会を経て、埋没した道標の復元と調査した道しるべ資料刊行の詳細な計画書が作成され、さらに予算見積り、会員名簿（年齢・職業・勤め先も）工程表などの書類を添付、会長が7月14日に補助金交付申請書を提出した。

ここで確定した事業の内容の骨子は次のとおり。

道標の悉皆調査と「調査票」（カード）の作成

点検再調査の実施とデータベース作成

埋もれた血流地蔵道標の発掘、記録、設置整備

道標全体のまとめ解説、歴史探訪用地図の作成、編集

ふるさと再発見「八千代の道標案内」の刊行

配布計画

### 血流地蔵道標の発掘作業から スタート

7月15日、依頼した工務店（有）蕨興業さんの都合で日程を繰り上げて、新木戸の道標発掘作業を開始、10名が見守ったこの日の成果は翌日の例会で報告された。（「郷土史研通信」31号に報告）



8月20日の例会では、吉橋・黒住らも参加して15名の会員が協力して倒れていた島田台三叉路道標の復元作業を行い、再点検調査も順調にスタートしたのだったが...

9月に入ると、「史談八千代」25号刊行と、文化祭用の準備に会の総力が投入され、「ふるさと」の仕事はその成果をふまえてという方向で、一応会長が完成までの作業マニュアルを作成、10月21日の文化祭のミーティングで呈示された。

ここで大きく計画が修正。

一つは、調査カードがそのままでは版下に使えないと判断し、専用の紙に浄書する必要があること。

二つめは、「道の案内記」は「史談八千代」25号のリニューアルではなく、市内主要古道と街道を網羅し、文体、形式をガイドブック風にそろえること、そのために会長が全体の構成を先に考えて、執筆者に割り当てること。

三つめは、アクセスでデータベースを整理し、「一覧表」と「データ解析」資料を作成すること。

文化祭と「史談八千代」25号の成果の余勢をかってやればなんとかなる、という当初の目論見は甘かった。

一同、本会始まって以来の大プロジェクトになりそうな気配を、感じざるを得なかった。

## 大プロジェクトに挑む

11月4日、市博物館で刊行に向けて、道標調査方法の基礎的な学習と、佐石塔群での野外実習を実施、恵志・清水ら16名が参加した。

11月14日、会長・牧野と市職員(秋山氏)で、「血流地蔵」道標を復元のため安食の篠崎石材店に搬入。

11月19日、世良田へバス見学会の昼食会場で、会長より「道の案内記」の執筆分担の提起。16ルートを11人(牧野・村上・森山・石井・関和・藤・小菅・園田・福田・成瀬・佐久間)で書くことになったが、半数は新しい書き下ろし、中でも「小竹からの萱田道」のように、全くの未調査ルートもあり、前途多難が予想された。

11月23日、石井・吉橋ら8名が参加した高津の正福寺に関する石造物調査で、未採録の馬頭観音道標を発見、さらに午後、上高野でも見落としていた道標を見つけ、「悉皆」をめざし、気を引き締めて最後の補充調査にあたることとした。



12月2日、会長・藤・成瀬で、井野-上高野間の未確定ルートの探索。翌日、藤が廃道化した古道入口の道標を見つけた。5日会長が拓本をとり、青菅青年団による建立の道標と判明、「萱田方面」の銘に臼井からの萱田道がつながった。

12月13日、会長・増田で、金子印刷と、本のイメージと経費見積りを打合せ。

このころ、メールに各執筆者のためいきがもれてきた。「悪戦苦闘」の未調査ルート(佐久間)「書いても書いても進まない」大師講遍路道(村上) 目標は年内入稿、がんばるしかない。

12月23日、例会で米本稻荷周辺の見学会を実施、米本青年団の道標をまた1基見つけた。

この日昼からの忘年会で、会長から「道の案内記執筆要領」が提起され、文体やスタイルを再度確認。(「司馬遼太郎風のノリ」という注文、これが難物?)

年末年始の休暇に入り、各々道のトレース、原稿書き、道標再調査が

精力的に続く。

2000年の大晦日の会長のメール「原稿続々着到感謝 どれも珠玉、読むのが楽しいのですが、時間に追われて悲鳴しきりというところ」。

明けて1月7日当会恒例の新春七福神巡り、今年は新会員を迎え、谷中を廻った。

1月9日、血流地蔵道標をアンカーボルトで接続固定完了とのこと。

1月11日、会長より市へ「進捗状況」の報告を提出。

1月12日、会長、篠崎工務店で接合部にコンクリートを充填補修する作業に立ち会う。

1月14日全日、市博物館で全体作業例会、恵志・清水・藤本ら18名が参加し、「調査票」の点検、地図の作成、「道の案内記」原稿の推敲、「道標一覧表」と「データ解析」のプランの検討などを行う。

ようやく作られる本の全貌が見えてきた。やるべき仕事の量、さらに遅れそうなデータ整理と入稿予定に不安がよぎった。データの確定と原稿締め切りが遅れば、データベース入力と組版担当の増田の負担が増す、増田の執筆予定の案内記「島田台からの萱田道」を藤が交代することにした。

このころ「データ解析」の道標種類の分類をめぐって、深夜メールでの議論が白熱した。

1月19日、新木戸の元の位置に「血流地蔵」道標がよみがえった。会長・福田・藤・博物館の海野氏が立会い、中島G.Sに一時設置された道標の写真撮影を行った。近く開始されるG.Sの改装工事のため、道標はその日に博物館に移され、会長と藤で拓本採りを行った。

1月21日、15名が市博物館で作業。成瀬がパソコンで作成した道標の位置と方向を示すシールを牧野・藤本親子が貼って調査票用地図の準備ができた。「調査票」の手書作業は、会長が特訓し、小菅・佐久間・園田・福田・牧野そして会長の6人の熟練した精鋭があたる。版下用紙は、データベースから増田が枠とタイトル・データを入れて印刷、数日後手書担当の元に届けられ、2月11日までに作成することとなった。

## 時間との闘い

1月27日、大雪が降った。週末の雪に現地調査が滞る。まだ何本かの「案内記」が入稿できず、またまた入稿締め切りが繰り延べられた。印刷屋への最終入稿まであと4週を切

った。

2月3日、市博物館で「血流地蔵」道標や高本入口の庚申塔の拓本で銘文の確認、午後からは会長・増田・藤が「道標一覧表」と「データ解析」のフォームを確認した。

「調査票」の完成が遅れ、データが確定しない段階で、「一覧表」と「データ解析」の作成作業を進めるしかない。増田・藤でデータ整理の作業、メールが交錯する深夜が続いた。

週末の2月10日、増田のパソコンから、大量の原稿がメールで発信された。「史談八千代」何冊分かはある。一部手書原稿の入力に手間取って、校正作業が遅れていた。ワープロ入稿の原稿も使用するワープロがまちまちなこともあって、句読点、行換えなどが揃っていない。それぞれが自分の原稿や、「調査票」の手書き作業を抱えていて人手も時間もなく、とりあえず藤がチェック作業を始め、村上が応援にまわった。

2月11日、文化伝承館で18人が全日作業、大阪から村上が駆けつけ、「調査票」に添付する写真の補充のため携帯電話で作業班の注文に応じながら、現地に車を走らせた。印西市の道標1基が最後に採録され、総数136基となった。2台のノートパソコンが稼動し、藤・平野(寿)は入力済み原稿の文章整理、増田は組み版に専念した。手書「調査票」の作成と地図、写真の添付作業、「道程図」の作成が、牧野・成瀬・中島・伊藤・畠山らで進んだが、しめ切り過ぎて入稿した原稿の校正と、「調査票」によるデータベース修正という大きな作業が残された。

最後の作業例会が翌週18日に設定された。それまでに膨大な量の校正とデータ整理などを終えなければならない。行き先地名のデータ入力という困難な作業を始めた成瀬が風邪でダウンした。村上がその仕事を引き継ぎ、完成させた。

「一覧表」と「データ解析」用のグラフ作成は増田・藤で完成しつつあった。深夜のパソコン作業が続き、17日夜、最後の「成田街道」の校正を終えたところで藤の目が眼精疲労で使えなくなった。増田のコンピューターもトラブルを起こし、組み版の仕上げとプリントアウトのため友人宅に泊り込んだ。

## ゴールが見えてきた

2月18日、文化伝承館で最後の作業例会、この日に全ての版下を完成させなければならない。平野(仁)・

那須ら17名が揃った。手書清書が終わった「調査票」と照合しつつ、「一覧表」の訂正を行う。目をいためた藤に代わり、関和がノートパソコンを叩いた。ページメーカーで組み版された「道の案内記」のプリントが、各執筆者によってチェックされた。「道程地図」の仕上げが遅れていた。閉館時間の5時を過ぎてても終わらなかつた仕事を抱えて博物館に移動し、作業を続行、「調査票」の版下を完成させ作業を終了した。



2月20日、勝田台の焼き鳥屋本郷で、金子印刷の高橋氏と会長・牧野・増田・藤で、「調査票」版下の入稿と、経費の打合せ。全部で430ページと予想以上に増ページになったので、オールカラーは断念。カラーの口絵8ページを入れ、さらに600冊増刷して予算内に納めることとした。

2月27日までに、関和が整理した「道標一覧表」はデータの修正を加えて完成、第4章の「データ解析」も、増田が集計したデータを、藤が作図し解説を加えて完成した。口絵を除く全ての組み版作業が終了し、増田が金子印刷に発送した。

3月3日、藤と牧野が担当のカラー口絵用写真の選択と構成を、市博物館で行い、増田に引き渡した。その際入稿の済んだ「データ解析」の時代区分を修正することとなった。ちなみに口絵のトップは牧野が探し出した昭和62年の「なりたみち」道標の写真。

3月5日、最後に残った口絵の画像と修正された第4章「データ解析」の組み版ファイルを郵送、全ての編集作業が完了した。(これでなんとか年度内刊行の目途がついたはずだったが・・・)

会長のメール「印刷原稿を金子印刷屋さんへ発送完了とのこと、ありがとうございます。ここに至るまでみなさま本当にご苦労さまでした。特に第4章のデータづくりでは最後まで若者4人組(わらび・増田・村上・成瀬の諸氏)の奮闘のたまものです。原稿チェックも同様でした。そしてデータはわらびさんが簡明かつきっちりともまとめてくれました。また関和さんの一覧表訂正完成と佐

久間さんのチェック、小菅さんの石造物問い合わせ生き字引役等等、パソコン連携の威力でした。

調査票書きでは小菅・佐久間・園田・福田・牧野・村田の諸氏にウデをふるってもらいました。調査票地図づくりでは成瀬さんを悩まし、道程図では中島さんを中心にがんばってもらいました。それぞれのところで力を発揮していただき重ねて御礼申し上げます。」

## 配本にむけて

3月13日、会長が市博物館と配本に関して、市企画政策課の支援のもとに場所の提供などの協力を依頼した。

3月15日、「広報やちよ」に各市民提案事業の進み具合が発表された。当会の「八千代の道しるべ」は1600冊発行、4月中旬には、郷土博物館などで公開、市内学校へも配布される。市民への配布は後日広報で知らせることとなった。

3月20日、役員12名が勝田台7丁目公会堂に集まり、経過報告と配本計画の検討。最終校正の予定だったが、金子印刷からのゲラは届かなかった。増田がページメーカーで出力した組み版原稿を用いて、第3章以外の全文の校正を全員で行った。

金子印刷の話では入稿がWindows、印刷機側のコンピューターのOSがMacのため、変換に手間取り予定より作業が遅れているとのこと。年度内刊行はむずかしくなった。

市博物館とは 刊行本は博物館に置くこと 市民への配布場所の提供 文献交換用の送付は博物館の実施ルートでやってもらうことについて了承をえているとのこと。

市民への配本は市郷土博物館で、5月6日(日)に第1回の配布、5月20日(日)午後「ふるさと再発見八千代の道しるべ」刊行の記念講演会を開催し参加者に配布する、更に6月2日の土曜日と10月の文化祭のとき、希望者に配布することとし、広報で周知してもらうこととした。

3月30日、会長が市役所に2度目の実績報告。(後に見本品を提出して報告完了。)

3月31日、満開の桜に雪が降る中、関和、藤、牧野の3人が牧野宅に集まり、やっと届いた一部のゲラで第1章「道の案内記」と第2章「道標一覧表」、第4章「データ解析」の校正を行った。コンピューター処理がうまくいっていないらしく、文字化けが多く校正作業は困難をきわめた。

4月6～7日、藤と牧野で、口絵、

第3章調査票を含む全ページの校正と点検を行い、8日の会の定期総会後、会長に引き継いだ。ページが飛んでいたり、再入力時のミス箇所が多く、たくさん付箋がついた最終校正だった。不安を残しながらも、あとは無事指示通りの完成を祈るのみ。

総会では、市民に800冊、市関係機関と図書館・学校などに439冊、本会員と会が御世話になった関係者に371冊計1600冊の配布計画が会長より示された。

4月9日、会長が金子印刷と納本は17日の予定と協議したが、その後更に24日に延期された。

4月24日、念願の初版100冊が納入された。カバーや製本にやや難があるものの、総ページ430ページの堂々たる書籍で、口絵もきれいに仕上がっていた。

会長と牧野が市役所に完了報告と成果品の納品を行い、市役所関係各機関に届け、また市長に出版記念講演会への招聘を行った。

4月28日、200冊が博物館に納入された。さっそく磯貝市教育長からていねいなお礼の電話をいただく。

4月例会の井野～上高野のフィールドワーク終了後、21名の会員も博物館までさらに歩いて納本されたばかりの本を受け取った。これまでの苦労が報われたすばらしい出来に感激もひとしおだった。

## 市民への配本始まる

5月1日、「広報やちよ」に「無料配布」のおしらせが掲載され、連絡先の事務局長宅には市民から問い合わせの電話が入ってきた。

5月6日(日)会員は10時に博物館に集合した。

11時から2時までの配布に向けて、作業開始。ところが、この日届けられる予定の残り1240冊が届かない。印刷屋にやっと連絡がついた。製本は終わっているが、連休で配送はできないとのこと。手元にあるのは、150冊足らず。最悪の場合、なくなつたところで、後日配布の予約を承り、ご納得いただくほかない。

併行して行う予定だった、市内外の各機関やお世話になった方々への発送作業は中止、会員へも本日の配布が終了するまで、一人一冊だけしか渡せない。



薄氷を踏むような、気持ちで受付が始まった。とぎれることなく、記名して本を受け取る市民の列が続く。熱心な方は、試みに数冊置いた「史談八千代」にも関心を示され、急遽牧野が、「史談八千代」を取りに行った。立派な本が無料では申し訳ないと、「史談八千代」をもとめていかれる方もいらしたからだ。

12時からミーティング。上高野研究に向けての計画を話し合った。

2時、あと数冊の本の山を残してこの日の市民無料配布は終わった。なんとか間に合った！一同ホッと胸をなでた。

この日の市民配布は136冊、会員配布は28日と合わせて1人1冊づつ32冊、かろうじて残った数冊を、明日大阪に帰る村上ら、どうしてもこの日に入用な会員で分けた。

この分で行くと、記念講演会の20日もかなりの来場者が予定され、事務局として駐車場整理要員などそれなりの準備を考えることにした。

### 成功に終わった記念講演会

5月20日は朝から快晴。午前中に主な会員が博物館に集合し、配本と、講演会にむけた準備を行った。

この日までに届いた本は250冊、前回ほどでないにしろ、決して余裕ある数ではない。ミーティングで、来所者以外への配布と会員の複数冊の配布は、講演会終了後残数を見てからと申し合わせた。

講演会場の学習室の壁には、蕨が準備した道標調査風景のスナップなどを展示、参加者や車の案内を担当する会員は胸にネームプレートを着けた。

会場正面には、中島が得意の毛筆の腕をふるった演題の垂れ幕とプログラムが飾られた。日差しの強い外では、牧野・福田・増田と、新会員の植草・大西が駐車場の整理と案内に立ち、汗を流す。

予定の12時を待たず、本を受けとりにくる市民がみえた。遠方からは松戸史談会、また道標調査を行っている市原市の南総郷土文化会の役員が、それぞれの研究機関誌を持ってお越しになった。

1時20分市長が来場、展示をご覧い

ただく。



1時半、蕨の司会で開会、市長の挨拶の後、会長が講演を行った。わいわいTV、そして会の記録用に増田がビデオカメラを廻した。

聴衆は約80名、会長の講演は、道標調査の取り組みから市民企画提案事業への応募、本の刊行に至るいきさつと、道標の種類や役割、道標からたどった古道の紹介やその歴史的な特徴など、約1時間ほどで終了し、ただちに道標見学会を開く。

見学参加者は約40名、博物館入り口の庚申塔道標と、ジョイフル本田脇の石塔群に案内する。博物館入り口の道は狭かつ車の通行が多い。会の黄色い旗が誘導と警備に役立った。

横浜市など遠路お越しただいて八千代市は初めてというお客様もおられ、ついで根上古墳、正覚院にも回る。途中、神職山本礼典家の庭の保存樹を拝見、良い天気恵まれ、さわやかな歴史散歩になった。

博物館に戻り、市民に113冊配布し残った本を会員で分ける。1人4冊あての54冊と、さらに調査でお世話になった方々へ差し上げる分もなんとか確保でき、ひと安心。

5時半から、勝田台のホテルの中華飯店で、ささやかに打上げの会を催した。出張から急いで帰った佐久間、新会員の酒井らと交え、17名が楽しく刊行の成功を祝った。

### 血流地蔵道標がよみがえった

5月31日、会長からのメール「メル友のみなさん、お喜びください。血流地蔵道標が元の位置(旧中島GS)に設置できることになりました。

日時 6月12日(火)現地14時、作業開始、早ければ1時間ぐらいで固定完了。2時間ぐらいかかるかも、コンクリート面基礎掘りに要する時間が不明、よって、来られる方は時間を見計らっておいでください。みんなで喜びの記念撮影をしましょう。」

6月2日(土)11時から3回目の市民配布。今回は印刷所から、残部800冊が納められてあったので、安心して記名者分の冊数をお渡しすることができた。

大慌てで自転車をこいで駆けつけ

てきた方などもおられたが、広報に発表の時間通り、午後1時に博物館での一連の市民配布を終了した。

この日の配布数223冊、合計472冊を一般の方にお配りすることができ、さらに公共機関・関係団体に計398冊を寄贈した。残りは、お世話になった方に、また10月の文化祭で市民に配布することになった。

6月12日、平日にもかかわらず16名の会員、市生涯教育課の相馬さん、ビデオ撮影家の内山氏、わいわいTVの花島さんが見守る中、時間どおり篠崎石材店の手で、血流地蔵道標の設置作業が開始。

中島GSは、新装工事が終わり、テナントが替わっていた。設置された位置は、掘り出された場所のすぐ左、敷地を20cmぐらいの縁石が車の進入をガードしている。

3時半、コンクリート下地のカットが終わり、その凹穴に道標の埋め込み部分がピタッとハマった。



一同記念写真を撮る。

これで市民企画提案事業として取り組んだ道標調査と道標の復元、資料の刊行という一連のプロジェクトが終了した。

3回にわたって配布された本は、口コミで反響を呼び、事務局には次の配布日を訊ねる電話が相次ぐ。ちなみに今回は、10月の文化祭の予定だ。

会員の手でお届けした方々からも、礼状が寄せられた。

「本日は大変すばらしい『八千代の道しるべ』御恵送いただき誠にありがとうございました。一頁、一頁大変興味深く拝読させていただいています。」(樋口誠太郎先生より)

「皆様のご努力がこのような形で残されると言うことは本当に喜ばしいことです。私たちの市では中々出来ないことで、羨ましくも思っております。今後とも皆様の活躍を期待しております。」(市原市石仏同好会 町田茂様より)



#### 編集後記

市への事業報告のため、会長から頼まれた「御用留」ような無味乾燥な記録。はじめはそんな気持ちでしたが、会始まって以来の大プロジェクト！ 会員一人一人の足跡を未来に残しておきたいと、だんだん熱が入ってきました。

こんなことしていた「若かりし日々」をいつか思い出せるよう、通信増刊号にしました。通信のファイルと一緒に綴っていただけたら幸いです。

文責：わらびゆみ